

高等学校の部 最優秀賞

私の高校生活

東京都立瑞穂農芸高等学校 畜産科学科 三年

古 田 ゆう子

私が都立瑞穂農芸高校で酪農を学び始めて二年が過ぎようとしています。この二年間、楽しかったことや嬉しかったこと、感動したこと、辛かったこと、悲しかったことなど色々な体験をすることができました。

都立瑞穂農芸高校では、二年生から酪農類型・養豚類型・実用動物類型の三つの類型に分かれて自分の興味のある類型で学ぶことができます。現在私は、酪農類型で成牛八頭、育成牛五頭を飼育しています。飼育している牛にはそれぞれ担当の生徒が付いています。私も二頭の牛を担当しています。

この二頭は私にとって大きな存在で、この牛たちから教えられることが沢山あります。私が一番最初に大好きになり、初めて担当させてもらった牛は、「トカチ」という名前の牛です。トカチと出会った頃、トカチはお産を経験したことのない子牛でした。私はトカチのお産が楽しみで仕方ありませんでした。お産の時は少しでもトカチが辛いように手助けをしてやりたいと思っていました。しかし、まだ出産予定日の二週間前の朝、「トカチが出産した」という連絡が登校途中の私の携帯電話に入りました。私はビックリして急いで学校に向かいました。学校に向かう途中、トカチは大丈夫か、子牛

は無事か、とても不安でした。学校に着くとすぐに先生や先輩、友達が子牛をタオルで拭いていました。子牛はとてもカワイイ小さなオス子牛でした。オスの子牛は約一ヶ月間学校で飼育した後、肥育農家へ売却し、二年後には牛肉になることが決まっています。私は、その子牛に「ポテチ」という名前を付けて、一ヶ月間体にお肉が付くように一生懸命に世話をしました。私がポテチと過ごした一ヶ月はあっという間に過ぎ、別れの日はとても辛く、悲しくて涙が止まりませんでした。

私がこの一ヶ月間で学んだことは、「人間は他の動物の命で生かされている」ということです。一生懸命にミルクを飲み、生きようとするポテチ。しかし待っている運命は殺され、牛肉になるということ。お肉になるために生まれてきて、育てられるオス子牛。とても残酷な運命だと思いました。けれども私たち人間は彼らがいないと生きてはいけません。今の日本は豊かすぎて、「食べ物のありがたみ」を忘れ、平気で食べ物を残す人が増えていると思います。残された食べ物の命は無駄になるだけです。だから、もっと食べ物に感謝して残さないで、ちゃんと食べるべきだと強く思います。

私はトカチのお産を見ることができませんでしたが、何回か牛のお産に立ち合いました。いつも元気な子牛が無事に産まれてきました。しかし、四月に生まれてきた子牛は「死産」でした。いつも安産ばかりを経験してきた私たちはどこか緊張感がなく、母牛の異変に気が付くのが遅くなってしまったのかも知れません。思い返してみれば、陣痛が弱く、陣痛が始まってから破水までとても時間が掛かっていました。やっ

と破水してもなかなか出てこない子牛は、本来まっすぐになっている首が曲がってしまい、引っかかって上手く母牛から出てくることができなかったのです。やっとの思いで子牛を引っ張り出して、子牛を見た時はホッと思いました。しかし、その子牛は息をしませんでした。子牛を逆さまにして、飲んでしまった羊水を口から出しても、目覚めさせようと子牛の顔を叩いても、子牛は再び息をすることはありませんでした。私たちの勉強不足、足りなかった緊張感。私たちのせいで死なせてしまった子牛を目の前にして、ただ泣くことしかできませんでした。

私はこの死産を経験して、命の尊さを知り、二度と同じ失敗を繰り返してはいけないと思いました。十月にはトカチの二回目のお産が控えています。私は担当者として出来ることをよく考え、トカチが無事に元気な子牛を産み、その子牛を死んでしまった子牛の分まで元気に育てられるように精一杯、努力していきたいと思います。

そして、私にはもう一頭「パルフェ」という担当牛がいます。パルフェは、とても優秀な牛で、共進会に三回出場し、二回ジュニアグラントチャンピオンを獲得しています。共進会とは、牛が産業動物として理想的な体型に最も近いといわれる牛を決める大会です。牛を引いて歩かせたり、牛をスタンディングさせたりして審査員の方に牛を見てもらいます。私もパルフェと二回共進会に出場させてもらいました。共進会の二ヶ月前より上手くパルフェを歩かせる練習をしたり、奇麗な姿勢で立つように調教を何度も繰り返し行いました。共進会当日が近づくと上手くパルフェをリードすることが出

来るか不安になり、精神的にも体力的にもボロボロになりました。

共進会当日は、とても緊張します。パルフェが私の言うことを聞かないで、暴れてしまったらどうしよう、上手くリードすることが出来なかったらどうしようなど色々なことが頭を過ぎりながら、パルフェを審査員の先生に見てもらいました。そして、パルフェを審査員の先生が高く評価してくれた時、とても嬉しくて涙が出そうになりました。そして、パルフェがジュニアグラントチャンピオンに輝いた時の喜びは、一生忘れません。

共進会を通して学ぶ事は、「仲間の大切さ」です。ずっと支えてきてくれた酪農類型の先輩や友達、後輩、先生にはとても感謝しています。みんながいなければ共進会であそこまで頑張ることが出来なかったと思います。

私は、たくさんの仲間や牛たちにたくさん大切なことを教わってきました。このような素敵な高校生活を私は送ることが出来て、とても幸せです。

私の将来の夢は、私の素敵な高校生活で学んだことを活かして「酪農家」になりたいと思っています。酪農家になって「命の大切さ」を子どもに伝えていきたいです。そして、残り少ない高校生活ですが、これからも牛から多くのことを学んで、立派な大人、素敵な酪農家になりたいと考えています。

高等学校の部 優秀賞

雑草という差別

東京都立農芸高等学校 園芸科学科 三年

石 倉 卓 也

「グヴィー…」草刈器の音で周りの音は耳に入らない。ゴーグルにより狭まった視界。作業を続けるうちに広い果樹園の中に一人きりのような錯覚に陥る。そんな夏の実習。それが私にとって、初めての本格的な除草だった。その頃私は、雑草なんてただの邪魔者、農業の敵としか考えていなかった。

そもそも雑草とは何か、それすらよく分かっていなかった。雑草は、一九〇〇年頃から様々な研究者によって定義付けされてきた。そして、現在は「栽培している植物以外の草」、または「人間にとって利益のない草」などが一般的だろう。私は当時、コハコベやスズメノカタビラなどの植物を雑草と言うのだと思っていた。しかし、このような定義からすると、この考えは正しいとは思えない。例えば一九二〇年頃、園芸種として持ち込まれたハルジオンだ。当時は店先に並ぶ綺麗な花として見られていただろう。しかし今ではいたるところに自生する、外来の強健雑草となっている。また、水田雑草だったデンジソウは、除草剤の普及等により、今では危急種にまで追こまれている。駆除しようとしていた植物を、保護しなくてはいけなくなっているのだ。畑で作業をしている時にも、雑草化したパンジーやトレニアなどをよく見かける。

そう、雑草かどうかはその植物の種が決めるのではない。その固体が生育している場所や状態によって決まるのだ。

こんなことを考え出したのは、二年生の春、生物部に入部してからだ。私は生物部で植物の名前やその由来、生態など、様々なことを学んだ。そして、一般的に雑草と言われている植物の中には、人間の偏見により減少しているものがあるということを知った。実際、農業の機械化や除草剤の普及に伴い、デンジソウのように気付かれないうちに減少している植物は少なくない。農芸高校の近くにある公園でも、ひそかに減少している植物がある。その原因は下草の過剰な刈り込みだ。この公園にはアマナやキンランなど、杉並区では貴重な多年草がいくつか自生している。しかし、過剰な刈り込みにより、年々株が弱り、減少している。そして、去年、アマドコロはついに絶えてしまった。生物部では、この公園をはじめ、杉並区の植物を学校のビオトープで保存している。しかし、生物多様性条約にも挙げられているように、生物保護の際、生物の生育環境も守る必要がある。そこで、公園管理事務所に除草回数を年一〜二回にしてみようという頼むことにした。しかし、草が生えたと近隣の方から「雑草がみすばらしい」と苦情が来るため、なかなか減らすことができないそうだ。このような偏見により、都市部で植物の多様性が失われるのは悲しいことだ。日本人は昔から様々な野生の植物を利用してきた。食用や薬用はもちろん、線路脇の植物を飼料にしていたこともある。建築の分野でも、茅葺屋根の芝棟にイチハツなどを植え、植物の生育状態から屋根の乾燥具合を考え、火災を防いでいた。こんな歴史があるのにも関わらず、

私たちは足元の草になんの有難みも感じない。それは、足元の草に対し、そんな歴史よりも畑や庭などで勝手に生えてくる植物、つまり雑草というイメージが強いからだろう。今、街中に蔓延^{はびこ}っている雑草と言われている植物は、ほとんどが食用や薬用として使える。また、そういった植物は生態系を保つのに大切だ。こう考えると「利益のない草」ではない。繁茂しすぎて邪魔にならない限り、たいいていの草は非農耕地では雑草とは言えないと私は思う。多くの人がそう考えるようになれば、街中に自生する植物が、人間の偏見により減少することも少なくなるだろう。

また、花壇や公園など一見緑があり、豊かな自然があるように思われる空間作りも、植物を減少させていることがある。人為的に園芸種や、どこか遠くから持ち込まれた植物が植えられることが多いからだ。人が美化のために緑を作った場所には、元々雑草と思われている植物があり、本来の生態系が作られていたはずなのだ。街中であっても、人が作った自然ではなく、本物の自然を伝えていくべきだと思う。そんな考えを主張するため、そして、街中の野生植物の現状を知ってもらうため、私は『ごはん CUP2007』に参加した。この大会で私は雑草と言われる植物の食べ方や、種類をいくつか紹介し、その保護を呼びかけた。そしてインターネット賞を貰うことができた。少しは野生の植物のことを伝えることができたと思う。

また、植物は食用や薬用など、知っている人のみ得られる利益や、生態系保護などのように間接的な利益だけではない。これからの新たな発展のためにも、人間にとってとても大切

なものだ。例えば、最近農業でヘアリーベッチを緑肥として使うようになった。また、アメリカでは、今まで雑草とされていたスイッチグラスがバイオ燃料の材料として注目されている。このようにすでにいくつかの雑草としか言われていなかった植物が、人間に利用されるようになっていく。さらに、遺伝子組み換えなどの技術が発達した今、これまで以上に様々な植物を利用することになるだろう。そして、それを可能にしているのは二七万種という植物の多様性だ。しかし、この二七万種のうちの四分の一が絶滅を心配されている。生態系のためにも、私たち人類のためにも、この植物を守っていく必要がある。そのためには一部の研究者だけではなく、私たち自身が、自然や植物のことを知らなくてはいけないだろう。私は将来、雑草や野草について学び、研究したい。そして、今まで雑草としてしか見られていなかった植物を農業に生かしたり、そんな植物でビオトープや庭を作ったりしたい。そんな活動によって、多くの植物が受けている雑草という偏見を無くし、自然と共存する日本を作るのが、私の夢だ。

病棟での涙

愛国高等学校 衛生看護科 三年

有 川 ひより

「おはようございます。これからS様を受けもたせて頂く学生の有川ひよりです。よろしくお願いします。」

精一杯の笑顔で緊張しながら私はこう言った。しかし反応

がない……。ここから私の成人実習が始まった。

成人実習では初めに外科病棟へ行った。外科病棟は私の憧れの科でもあり、とても意気込んでいた。外科病棟の一番の特徴は手術をするということである。今回受けもたせて頂いた患者様も勿論手術を受け、受けもたせて頂いた時は術後二日目という状態であった。

S様は、四十代の男性の方である。病名は胆石症だ。胆石症とはいくつか種類がある。S様はビリビンカルシウム石というものだった。S様に症状について伺うと、

「背中に響く様に、とても痛い。立つことは出来ないくらい。」とおっしゃっていた。手術内容としては、S様の場合、胆石が大きかった為胆嚢摘出だった。

いよいよ受けもたせて頂く日が来た。いつも以上に張り切っていた。しかし、この日のS様は私の質問など全てに反応がなかった。バイタルサイン測定時も、身体ケア中も全て反応がなく、私一人で話をしている状態だった。この時「S様に全拒否されている。どうしよう。ベッドサイドへ行くのが怖い。」とまで思い、その日は長い一日に感じられた。一日の最後のお礼の挨拶をするため病室へ行くと、S様は指導者さんと笑顔で会話を楽しんでいる様子だった。この時、何に對してかはわからないが、カツと目の奥が熱くなり、腹が立った。今考えると、その感情は自分に対してだと思う。この日の帰り道、私の言動全てを思い返した。何がいけなかったのだろうか。傷付ける様なことをしてしまったのではないか。どうすれば良かったのか。目まぐるしく、一場面ずつ流れていた。誰かに相談しようと思ったが、全拒否されていると言うのが、

負けず嫌いの私にとって悔しく、言えなかった。

次の日も一日目と同じく、重い空気が漂っていた。ただ少し違うことは、首振りが反応として現れてきたことだ。こんな些細なことで、私は嬉しく思えた。表情は変わらないものの、コミュニケーションが取れているということを確信した。そして早期離床のため、病棟内を散歩することにした。この時、S様はとても背が高いと知った。

「とても身長が高いんですね。」

という、S様は表情を変えずに、

「小学校から高校までバスケットボールやって、今はバスケットクラブのコーチをしてるんだ。」

とおっしゃり、この時私はS様と会話できたということに驚いた。するとS様は

「胸張って歩けねえよ。痛い。」

とおっしゃった。私はこのS様の気落ちしている理由は、術後の痛みではないかと気付くことができた。腹部の手術の場合、術後は腹圧をかけてはいけないので、気を付けることがたくさんある。その中から大切なことを私は実演しながら説明した。するとS様は、それまで強張った表情を一変させ、どこか穏やかな表情になった。そして

「演技上手だね。」

とおっしゃって下さった。この時何かふんわりと温かい物を感じた。

次の週となり、朝の挨拶をしバイタルを測ろうとした時、S様はボソッと

「当たってごめんね。」

とおっしゃった。初め訳が分からず、

「どうかなさいました？」

と伺うと、下を向きながら

「ずっと当たってたのに、俺のこと良くしてくれた。怒らないでずっと付き添ってくれて……ごめんな。」

と声を震わせながら何度もごめんとおっしゃっていた。私はS様が、この様なことを考えていたとは知らなかったので、嬉しいというより驚いた。そこで私は、

「一度も当たられたなんて思っていないですよ。S様は術後で傷口が痛むと思うのに、毎日リハビリをなさっていてすごいと思っていました。」

と言うと、S様は更に涙ぐんでいた。その後S様は笑顔でバスケットについて熱心に教えて下さったり、散歩など自発的に声を掛けて下さったりした。私はS様から病気について聞かれても答えてやろうと意地を張って準備をした。案の定S様からはたくさん質問された。私は全てわかりやすく説明することができた。すると

「もっと早くに聞いとけばなあ。」

と呟くようにおっしゃっていた。この時、学びが実のり、充実した気持ちになった。

退院の日……。S様と朝お会いするとポタポタと涙して下さった。私はこの日のためにパンフレットを作成した。S様の生活習慣や仕事復帰について、直して頂きたい食生活についてと禁忌の運動を中心に作成した。

「こんな俺のために本当にありがとう。色々ごめんね。煙草とお酒は有川さんのためにも減らします。その代わり絶対

にこのままの優しい看護師さんになるんだよ。」

この言葉を聞き、この時ばかりは私も泣いた。S様とは泣き別れとなった。退院というものは、とても喜ばしいものだ。しかし私にとって悲しい別れでもあった。もっと話したかった……この日私の涙は止まらなかった。

この経験で得たものは一生忘れないだろう。一生懸命学ぶことは患者様のためでもあるということ。決して諦めてはいけないということ。真の信頼関係とは心奥深くで通じ合い、尊重し合うということを知った。そして人間関係を築くまでの時間がとても大切で欠かせないものと分かった。今後この貴重な体験を実習に生かしていきたい。

壁

岩倉高等学校 運輸科 三年

神 長 淳

都内の私立高校に通い始めて既に一年半が経ちました。高校三年生になった私は今、人生の進路を選択する重要な岐路に立っています。私には子供の頃から思い描いている将来の夢があります。それは、電車の運転士です。そもそも私が鉄道業界を目指すのは、私自身が育った環境が大きく影響しています。

私の家には自動車が無かったため、鉄道を頻繁に利用してきました。また、親に連れられて地元を走る路線の線路脇で電車を見ていました。このような環境で育てられた私には、

鉄道がかけがえのない存在となりました。

私は東京都内の岩倉高等学校という高校に通っています。

この学校は、日本でも二校しかない鉄道の専門科目がある高校の一つです。卒業生には鉄道のプロフェッショナルも多く、鉄道業界では有名な高校です。私はこの学校の運輸科に進学しました。他にも、機械科、商業科、普通科が存在していますが、鉄道専門の科目が多い運輸科を選びました。一年次から鉄道専門の科目がカリキュラムに含まれており、国語や数学といった一般科目も勉強しつつ、鉄道の基礎を学んでいきます。二年次になると、鉄道コースには営業が科目に加わります。ここでは、大手鉄道会社が研修で実際に使用している教材を使い、運賃、料金の計算や定期券の発売方法など、専門的な知識を深めていきます。また、一年次から二年次にかけて旅行実務という科目が存在します。この科目では、旅行業界の法律や約款を学び、国家資格取得に大きく役立っています。私もこの科目と夏期講習で学んだ力を活かし、二年次に旅行業の資格の中で難関である、総合旅行業務取扱管理者試験に見事合格しました。そして、二年次には一番の目玉となる運転実習があります。この運転実習には、本物の電車の運転台を使用した、精巧なシミュレーターを使います。CGでは天候や上り電車下り電車の設定ができ、あたかも本物の電車を動かしているような気分になります。学校内にあるシミュレーターは文化祭時に一般の方に解放され、常に人気があります。三年次はより専門的な学習となります。授業は科目数が多く、実習も多く、飽きる事ありません。カリキュラムが充実しており、効率的に学習できます。

私が岩倉高校に入学して一番驚いたことは、先輩の多くが鉄道会社の駅でアルバイトをしていることでした。東西南北に伸びる鉄道でアルバイトが出来る事は、鉄道会社に就職した卒業生達の多大なる努力があったからこそだと感じました。現在、私は部活動の先輩に誘われ、大手私鉄のターミナル駅でアルバイトをしています。私はアルバイトを通して様々な障害があるお客様と接してきました。中でも車椅子を使用しているお客様と接する機会が多く、普段の生活では経験できない事も沢山ありました。車椅子を使用しているお客様が電車を利用する場合には、駅のホームと車両間に隙間が存在するため、専用の携帯型折りたたみ式スロープ板を車両とホームの間に渡します。ある日、一組の年配のお客様が降りてきました。私はいつものように専用のスロープ板をホームと車両の間に渡し、降車の案内をしました。その際、付き添いの方が私に対し、しきりに礼を述べてきました。そのときの言葉を覚えています。「いつもありがとうございます。助かります。」乗降案内の際、いつも声を掛けられていますが、このときはとても感動したことを覚えています。この他にも、線路内に落ちた障害物手帳を拾い上げたり、他社路線の改札口まで案内するといった、日常生活では決してできない事です。このアルバイトを通して、障害があるお客様との触れ合いを学んできました。

私は、鉄道会社などの交通事業というのは、社会的貢献が非常に高い業種であると考えています。考えてみて頂きたいのです。現代の日常生活に必要な存在になっている鉄道路網が、今この日本から消えてしまったらどうなるでしょう

か。毎日通勤時間帯になると首都圏の鉄道は軒並みマッチ箱のようなギュウギュウ詰めの満員電車になります。その輸送分をタクシー・バスなどで補おうとすると、道路は軒並み渋滞し、時刻表通りにバスは来ません。重ねて満員で乗れないので次のバスを待つてくださいなんて言われた日には堪りません。そうなると、遅刻は日常茶飯事。定時に出勤できる社員は少ないでしょう。こう考えると新幹線から地下鉄まで、鉄道の輸送力は計り知れないものです。日本の経済活動は交通事業がなければ成り立たないといっても過言ではないはずです。私は、人から信頼され、快適な輸送サービスを提供する、鉄道業界に就職したいと考えました。

幼い頃の環境がもとで鉄道業界を目指している私ですが、もうすぐ就職試験が迫っています。先にも述べましたが、私は鉄道会社を第一志望とした就職を希望しています。幼い頃に抱いた夢を、追い続け、現実のものとするためには今の時を頑張り、行く手にそびえ立つ大きな壁を乗り越えなければならぬのです。壁を乗り越えて初めて、働くことの喜びを得られるのです。



高等学校の部 佳作

きっかけは帰り道

東京都立農芸高等学校 園芸科学科 三学年

吉 川 沙 耶

私は高校二年生の時、こんな体験をしました。その日は部活動が無かったため、普段より早く帰りの電車に乗りました。そして地元の駅に着くと、前の車両から白杖を持ったおじさんが出てきて改札口へ向かって歩いていくのを見えました。私も改札口へ向かうと、そこには白杖をつきながら懸命に改札を通ろうとするおじさんの姿がありました。何度か失敗してようやく駅を出られたのもつかの間、今度は駅前にたくさん止められた自転車に何度もぶつかっていました。私は何か手助けしなければと思ったのですが、何をすればいいのかわからずおろおろしている間に、おじさんはどこかへ行ってしまった。何度ぶつかってもまたすぐに歩き出すその姿は、今までに何度も同じような経験をしてきたのだろう、と感じさせる歩き方でした。この日からしばらく、私はなぜあの時助けてあげられなかったのかとすごく後悔し、何もできなかった自分が恥ずかしくなりました。

この事がきっかけとなったのか、地元の商店街で白杖をついた人、時には盲導犬をつれている人が目にとまるようになり、今まで気付かなかっただけで意外に目の不自由な人が身近にいたことに気が付きました。そして私はもっと目の不自

由な人について、ちゃんと理解できるようにしたいと思うようになりました。

そんなある日、あるデパートの屋上で『盲導犬キャンペーン』というイベントがあり、盲目体験ができることを知りました。これは絶好のチャンスだと思い、友達も誘って参加しました。そこには数頭のまだ訓練中の盲導犬と若いトレーナーさん達がいました。早速盲導犬と歩かせてもらえることとなり、アイマスクを付けて盲導犬と人をつなぐハーネスを持たせてもらいました。そして実際に歩き始めると、思っていたよりスピードがあり驚きました。すると後ろからトレーナーさんの指示を受け、盲導犬はきちんと止まる所は止まり、障害物をよけて、安全に私を導いてくれました。屋上一周だけなのに、目が見えないだけですごく長く感じました。私はこの体験を通して、盲目がどんなに怖い事なのか実感することができました。

「私はアイマスクを取ればすぐに見えるようになるけれど、盲目の人はずっとこの暗闇が続くんだ……。」

そう考えると、とても恐ろしく、健全に生活できる事がどんなに恵まれたことなのかわかりました。この前、駅で出会ったおじさんはこんなに恐ろしい暗闇の中、一人で歩いていたなんてすごく勇気がある人だったんだと、この時初めて思いました。そして盲導犬と歩いてみて、一人では無理な事でも盲導犬がいる事で、可能にできる事がたくさんあるのではないかと、盲導犬の必要性を感じました。

しかし、後々調べてみると、全国でたくさんの方が盲導犬を望んでも、一年で百頭ほど。十頭中では三〜四頭ほどしか

盲導犬になれないそうです。さらに一頭育てるだけでも何百万円ものお金がかかるのです。それだけの手間とお金をかけてやっと盲導犬は育ってくれます。本当に大変な仕事だと思います。しかし、トレーナーさん達は誰一人としてつらそうな顔をせず、いきいきとした笑顔で犬と接していました。私はこの時、今まで「仕事」とは「お金を稼ぐため、しなくてはならない事」だと思っていました。なので大人になれば、必死に生きるために働かなければならないという印象が強く頭にあったのでやりたい事も見えてこず、将来に暗いものを感じていました。しかし、今回盲導犬とトレーナーさん達に出会い、仕事とは「しなくてはならないからしかたなくやる」のではなく「楽しい、好きだからやる」という道もあるのだという事に気が付きました。「自分の好きな事で、たくさんの人々を幸せにする」そんなすばらしい魔法のような事でも仕事にすれば実現できる。そう教えられた気がします。

この貴重な経験は、私にとっても大切な事をたくさん教えてくれました。

私は今、自分の幼い頃から変わらない動物好きを生かして、「障害や病気などで苦しんでいる人々の手助けができる」そんな仕事ができたい。と自分なりに夢をもつことができた。まだまだ社会の厳しさや具体的な職業についてわからない事・不安な事もたくさんありますが、私もトレーナーさん達のように、人々に笑顔を与えられるような人間になりたいです。

植物との関わり

東京都立農産高等学校 園芸デザイン科 二年

石 渡 詩 織

私はただ漠然と「農業をしたい」という気持ちでこの農産高校に入学しました。こう思うようになったきっかけは幼少の頃、家の近くに祖父の知人の大きな畑があり、農業に触れる機会が多かったということ、中学生の時に田植えをしたこと、移動教室での農業体験をしたことです。

私はこの農産高校で過ごした一年間を振り返ってみると、この高校に入学して本当によかったと思っています。それは、普通科高校では体験することができない、野菜や草花の栽培を実際に行い、これらを通して、普通の日常生活では感じることができない、喜びや楽しみを感じることができたからです。

初めはほんの小さな種子が、土から芽を出して、日を重ねるごとに大きく成長し、その後定植し、必要があれば除草する。そして例えば、授業中に教わった植物を見ると、「この前、授業で教わった植物だ。」と改めて見るようになりました。そういうことを無意識にしている私自身に気付いた時には、驚きました。学校の中で植物とよく関わるようになり、私の生活に自然と入ってきたのかと私は思いました。

四月の中旬まで花を咲かせるユキヤナギも、この高校に入学したことによって、名前と姿を知ることができました。もしこの高校に入学していなければ、可憐に、綺麗に花を咲か

せているユキヤナギさえも眼に止まることすらなかったと思います。今まで気付かなかったけれど、意外にも身近にユキヤナギの存在があったのです。気付かなかったのは名前と姿を知らなかったこともありですが、興味がなかったのが一番の理由だと私は思いました。植物に興味を持つようになったって良かったとユキヤナギの花を見かけるようになった四月に改めて思いました。

楽しみにしていた収穫。そこまでの過程に、私は植物の成長に喜びを改めて感じました。特に私が印象に残ったことは「農業科学基礎」の授業でダイコンを栽培したこと。私のダイコンの芽は、周りの芽よりも少し成長が遅く、間引きをするタイミングも一週間遅れでした。周りの友人のダイコンと比べるとひとまわり小さく、成長が遅いことが気にかかり、ちゃんと育ってくれるかどうか心配になりました。結果は、遅れての収穫になりました。収穫する時には、小さいながらもちゃんとここまで育ってくれたんだと嬉しくなりました。

この他にも入学して良かったと思うことがあります。それは、園芸植物に興味をもてるようになったことです。私は入学してから、通学路や身近にある植物に自然と目がいくようになりました。以前までは全くそんなことは無かったのに、いつの間にか、この高校に入ってから興味を示すようになっていました。

はじめは、ただ漠然と「農業をしたい」という理由で入ったこの高校ですが、たくさんの植物に触れることができ、自ら野菜を栽培することができ、春にはユキヤナギやフジ、夏

にはベチュニア、コリウス、テランセラなどに目に触れる楽しさを感じられることできて、本当によかったと思い、嬉しくも思っています。

私が過ごした一年余りの高校生活の中で、何となく普通科の高校に行くよりも、この農産高校に入学した方がよいとは思っています。専門高校だから専門分野に関することはやはり難しいところがあります。それでも、自然や植物にふれあえる農産高校に入ってよかったと思います。まだ名前のわからない植物もありますが、今後も、園芸に関する専門的な知識や技術をこの農産高校で身につけていきたいと思っています。また、今後少しでも多くの人が周りの植物に目を向けるようになればよいと思います。

「今」そして「未来」に

東京都立農産高等学校 食品科 二年

大 場 優 弥

今日、この日、この時間まで僕はこれからの「大人としての生活」についてずっと悩んでいる。僕の今の夢：まだ見つけることが出来ずにいる。長い人生にとっては小さな一歩だが、高校二年の僕には大きすぎる一歩を踏み出そうとしているところだ。ある歌の歌詞の一部に「夢を語るフリしてればなんか大人になれる気がした」という部分がある。今までの僕の経験からして、この歌詞のように、もう自分の一歩前に迫っている「就職」や「進学」について語っているだけでは

いけないんだ。もうそんなに余裕は残っていないのだと思っている。

今、自分の親やテレビに写っている社会人、学校の先生方を見ていると、やはり一言では表すことの出来ない程立派だと思う。僕も将来は一人前の人間になり、社会に貢献することが出来る人になりたいと考えている。そのために必要だと思っていることは、まず一つ目に、コミュニケーション能力だ。例えば、上司の人や他会社の人との会話で良いコミュニケーションをとることが出来れば、それが自分の会社のためにもなるだろうし、そういった経験を重ねていくことによって、自分を成長させることが出来るだろうと思う。コミュニケーション能力を身に付けるためには、恥ずかしがらず、「自分を出すこと」を心がけていかなくてはならないと思う。二つ目は、行動力を身に付けること。僕が思うに、行動力のある人はほとんど頭が良い。行動力を自分で身に付けるには本当に苦労するだろう。しかし、毎日の善い行いは継続し、悪い行いは改善する。それを続けていくことによって、自然に行動力は身に付いてくるものだと僕は思う。最後に必要とされるものは、礼儀作法だと思う。礼儀作法を身に付ければ第一印象はきっと良いものになり、何よりも「信頼」されるようになると思う。信頼されることにより自信もつく。コミュニケーション能力も行動力もまず礼儀を身に付ければ後々ついてくるものだと思える。その他にもまだまだ必要なものがあるだろうけれど、まずはこの基本的な三つを身に付けることが必要だ。

僕は大きな夢、大きな目標をもっている人に憧れている。

サッカー選手ならば「ワールドカップで日本代表を優勝させる」とか、医者ならば「世界各国に散らばっている病名もない病気を治す、不治の病だと言われてきた病気を治す」、料理人ならば「世界一美味しい料理を作って沢山の人々に食べてもらう」など。夢は数え切れないほど存在するはずなのに、年々ニートやフリーターやらの人口が増加してきているのが現状だ。このような結果になってしまっているのはやっぱり学校生活に問題があると思う。特に僕たち高校生のような時期である。僕は、学校内の校内発表会でも同様のことを全校生徒の前で言った。「働くということ、それは人が生きていくためには欠かせることの出来ない大切なことの一つである」というテーマ。結果からいうと、「働くことの原点は、日ごろの学校生活によって決まる」ということだ。実際に、テレビや新聞に「中卒や高校中退者が増えてきている」というニュースがよくある。そういった人たちのほとんどは、学校で何をするのかというはつきりとした目的意識を持たないまま学校生活をすごしていたのだと思う。このような人々を減らしていくためには、国語や数学などの授業を増やすことより、将来へ意識を向けさせるような授業や個人面談などの機会を増やした方が、何か今後に大きな変化をもたらしてくれるだろうと僕は思っている。

僕たちは農産高校で普通科目だけではなく、類型に分かれてそれぞれ違った専門の授業を受けている。僕は食品デザイン類型を選択し、食品の流通経路や販売についての勉強をする「食品流通」の授業と、加工食品に改善を加えてみんなで見聞を言い合ったり、実際に製造したりする「食品デザイン」

という授業を受けている。ほかにも食品を作るにあたっての基本的な勉強をする「食品製造」や、週に一度三時間をかけて食品を製造する「総合実習」がある。総合実習では食品を加工して、その後製造工程や原材料など、その内容にあった課題を詳しく書きレポートとして提出する。作った商品が文芸祭に出されたりするので、みんな週に一度のこの貴重な授業だけは無駄な話も少なく真剣に取り組んでいる。僕は実際に、このような授業を受ける中で将来について考えたり、「コミュニケーション能力」や「行動力」、「礼儀作法」などが大切だと思うようになったのだ。

最終的に僕が言いたいのは、「もうすぐ大人になるんだ、自覚をもたなきゃ。そして僕たちがこれからの未来を切り開いていくんだ。」という強い気持ちだ。

将来の夢・理想

東京都立農産高等学校 食品科 二年

木 所 早 織

皆さんはヘルシービットのデイケアのレストランを知っていますか。そこは食事を楽しむ事を大切にし、お客の健康状態などに合わせて料理を作っている高齢者のためのレストランです。管理栄養士の方を中心として動いているようです。

私はこのように、お客に合わせて料理を作る、というのは良い事だと考えています。作る側は大変だと思いますが、食べる側としては自分の好みや健康状態に合わせてもらえれば食

べやすくて、嬉しいと思うからです。私は、ヘルシービクトのようにお客の健康状態に合わせて料理を作る所が増えて欲しいです。また、高齢者だけでなく入院患者も利用できるようになって欲しいです。そしてそのように個々の健康状態・好みなどに合わせ料理を作る所で働くのが私の夢です。そう思うようになったのは最近の事です。

私は病院食はあまり美味しくないというイメージを持っています。それは入院した事のある家族や親戚が口を揃えて言うからです。お見舞に行つて食事風景を見た事があります。その時に、残している人を何人も見ました。理由は様々だと思います。食欲がない人や元々少食の人もいるでしょう。けれど、栄養をとり体力をつけなくてはいけない人達が残すというのはどうでしょうか。あまりにも多いとしたら少し考えた方がよいと思います。本人も頑張っていると思いますが、出来るだけ食べた方が良いでしょうね。残すのは我が儘だといえばそうかもしれませんが、体調が悪く食欲がない人に残さず食べなさいと強く言えますか。もしその事により食べる事が苦痛に感じるようになってしまったらどうしますか。その人が自分にとって大切な人だったらどうしたら良いと思いますか。私は良くわかりませんし、どうすれば良いとも言えません。

食べる事を避けて生きていく事は出来ません。全く食べないというのは無理なのです。だからせて苦にならぬようにしたいのです。毎日のことです。それが苦でないというだけで気持ちもだいぶん違うと思うのです。また、少しでも楽しみになれば毎日食べるのですから、どんなに良い事でしょ

うか。もちろん食事のどこを楽しみにしても良いと思います。私の家族が入院していた時、医者に「たくさん食べて体力をつけましょう。」と言われていました。体力がつき次第、病院を変わる事になっていたようです。けれど実際はあまり食べていませんでした。本人は頑張っていたのですが、多くは食べられなかったのです。頑張つて食べても吐いてしまうという事もあったようです。私が見ていた限りでは、食べる量は本当に少なくて半分以上を残していたように思います。そんな様子を見かねたのか、医者は「病院食でなくてもいいから好きなものを食べて体力をつけましょう。」と言ったそうです。それから言われた通り好きな物を食べてました。病院食も食べてました。それでも量は少ない方でした。自分だけ好きな物を食べている事に負い目を感じていたようでした。

結局食べる量はあまり増える事はありませんでした。それでも、食べ慣れている家の料理や好きな物は少しは多く食べていたように思います。好きな物を食べるという事が病人にとって普通の事だったら、気を遣わずに出来て食べる量が少しでも増えていたかもしれないと思います。この事が一番大きなきっかけだったと思います。

私は、そういう現実を実際に見たり、考えたりしているうちに、少しでもそういう人が減らせたらと思うようになってたのです。難しい事だと思えます。でも、好みに合うもので栄養もきちんと取れる。そんな料理が作れたらいいのになと思います。

最近、私の祖父が亡くなりました。詳しくはわかりませんが難病にかかっていたようです。祖父は寝たきりの生活になっ

ていました。祖母が祖父の楽しみはあなた達に会う事だよ、とよく言っていました。その祖父は甘い物が好きな人だったのですが、薬のせいのか甘い物を嫌うようになっていきました。そして、ご飯も食べる量が減っていきました。食事の間、口を固く結んでいる事もありました。そのうち医者に栄養ドリンクをもらうようになり、食べない時はそれがご飯の代わりでした。何とか飲ませようとしていましたが、それはとても甘く、少し飲ませるのも大変なようでした。祖父はどんどん弱り、水を飲むのも難しくなっていました。私は何も出来ずにいた自分が嫌でした。出来たところで大きな変化があったとは思っていませんが、少しくらいはあったかなと思いました。

そんな事もあり、私は強く思いました。個々に合わせる事もやはり大切だと。もっと知識・技術が欲しいと。さらに夢への想いが強くなりました。

そのためにも、せっかく農産高校食品科に入学したので授業で学んだ事を生かしていきたいと思います。

私は一年の「農業科学基礎」で作った野菜はほとんど祖父の家に持って行っていました。無農薬という事でとても美味しいといつも喜んでくれました。それを見ていて、食材も大切だなとわかりました。これから学ぶことがたくさんあると思います。食品について学ぶ、その一つ一つを大事にしていきたいです。

そして将来は、食材・栄養・味が出来る限り良いもの、食べる側の好みに合う、または望むものが提供できる管理栄養士になれるように頑張りたいです。

農産高校でみつけた本当の自分

東京都立農産高等学校 農産科 三年

松 下 善 行

「学校に行くのがめんどくさい」「朝起きたくない」、僕は人と話すのが苦手で中学の時から学校を休みがちでした。高校に入学しても、「どうせ義務教育じゃないから」という甘えもあり、三ヶ月程で辞めてしまいました。そして、何の目標もなくなった僕は、好き勝手な生活を送るようになっていきました。バイトもせず、家のお金を盗んで遊びに出かけたり、親に無断で外泊を繰り返す日々。母親が「今までお前をな、一生懸命育ててきたのは一体何だったんだよ！このままなら、死んでしまいたいぐらいだよ。」と言っても、まるで他人事のように無視しているだけでした。朝帰りをしていたある日、自分と同じ年代の高校生達が登校している姿を目にしました。「ああ、みんな楽しそう…俺は何やってるんだろう。」と、僕は天と地の差を感じ、それ以来高校を辞めた事がコンプレックスになっていきました。

その後は、母親のリストラによって自分が働かなければならない状況になり、そこで初めて親の苦勞を知りました。毎日決められた時間に働きに出かける事で、自分もやればできるんだと自信がもてました。しかし、高校を辞めた後悔だけは、いつまでも心に残ったままでした。

そんな中、今から三年前に農産高校をインターネットで知りました。僕は食べ物なら興味があつたし、定時制なら働き

ながら通えるので、ここしかないと思いました。一方で、「また辞める事になったら、自分がイヤな思いをするだけじゃない。」という不安もありました。でも、「このまま一生、コンプレックスを背負って生きたくはないんだ!」という、強い思いは僕を受験勉強へと向かわせました。こうして試験は無事合格、入学式では先生達に拍手で迎えらる事ができました。

ところが、暫くして学校生活に慣れてきた頃、年齢が離れているという物珍しさだけで話し掛けられ、戸惑いました。「一人でした方がよっぽど気楽だよ。」とも思ったものです。でもある日、「ねえねえ、まっちゃん。今日の体育のバドミントンさあ、一緒にやろう!」と、誘ってきてくれたクラスメイトがいました。ついこの前までは会った事のない他人です。年齢だって全然違うのに、この時、物珍しさではなく、クラスの一人として僕の事を受け入れてくれたのです。

昨年の文化祭では、クラスで喫茶店を開く事になりました。僕はそこに出すクッキーを作る係になったのですが、千枚も焼かなければなりません。同じように作っていても、中にはコーヒードミみたいに焦げ臭くなったり、食塩が残ってジャリっとした食感になるものもあり、苦勞しました。それでも、係のみんなと同じ目標に向かっていた事が、僕にとって大きな喜びでした。そうやって焼き上げたクッキーをお客さん達が残さず食べていってくれたのが嬉しかったです。また、無口だと思っていた友達が、自ら廊下に出て、「いらっしやいませー!!」と、大声で呼び込みをしている姿がとても新鮮に見えました。新しい発見ができた、僕はさらに嬉しくなり、一緒になっ

て「いらっしやいませー!!」と叫んでいました。いつもとは違う学校生活で楽しみを感じる事ができ、千枚ものクッキーをクラスメイトと作れたのは貴重な体験だったと思います。

また、普段の授業で一番大変だと感じるのが、冬の農場実習です。北風がビュービューと吹きつけてくる夜の寒さの中では、体が思うように動きません。その中で、スコップやくわを使って土を耕さなければならぬ時は、つい「寒いし、疲れるから面倒くさいな」と、思いがちになります。しかし、いざ作業を始めると、周りの何人もの人が、背中から湯気をモワッと立ち上らせて動いていたり、一言も喋らずに黙々と土を掘り返して取り組んでいます。その姿を見ていたら、目の前の事を頑張るかどうかはその人次第、年齢は関係ないんだと思いました。そして、自分より年下のクラスメイト達でも「すごいなあ。見習おう!」と、感じました。

26歳の高校生として、僕が楽しみにしている事。それは、洋服の物流センターでの仕事を終えて毎日学校へ行く事。そして、学校で一番大切にしているもの。それは、クラスメイトと共に過ごせる時間。コンプレックスなんてどこかへ消えてしまいました。「平凡そうに見える毎日の生活がとても大事なんだ」と、気が付く事ができたのです。

今、僕には、一つ一つの出来事がとてもまぶしく見えます。一度は高校を辞めてしまいましたが、弱い自分から逃げずに、「また、学校へ行って勉強をしたい」と、思い続けました。そして、周りには、いつも僕を温かく支えてくれる人達がいきました。だからこそ、今の自分があると思います。

僕は将来、福祉関係の仕事に就きたいと考えています。こ

れからは、福祉の事をさらに勉強しながら、「自分は今、何をすべきか?」「今しかできない事は何なのか?」という事を追い求めていきます。もう二度と自分に後悔しないために。

人生の転機

東京都立瑞穂農芸高等学校 畜産科学科 一年

進 藤 妙 花

“人生とは不思議なものだ”と、私は最近思うようになりました。まさか、気まぐれで取った行動で、こうも自分の生き方が変わるとは思ってもいなかったからです。

高校に入学するまでの私は、本当に無気力な日々を送っていました。何事にもやる気がなく、流れに任せて過ごしてきたのです。しかし都立瑞穂農芸高校に入学し、私は変わりました。

都立瑞穂農芸高校を受験しようと決めたのは、全くの偶然でした。中学校三年生の時、学校から配られた学校説明会のプリントを見て、都立瑞穂農芸高校が自分には一番合う気がしました。また友達が「絶対にこの学校に行きたい!」と言っていたので、私も受験することになりました。

学校見学と体験入学に参加してみると、予想以上に楽しかったのです。私も「この高校に通いたいな」と思うようになりました。そして、運良く合格しました。しかも中学校の友達と面接の時に知り合った友達も合格していました。本校に入学後、二人に連れられて牛舎にいったことで、私の運命は大きく

変わりました。

私は無気力な人間だったのですが、最初の頃は牛への気持ちも「うん、確かに可愛いね。でも、こんなもんだろ」という感じでした。二人が牛に一目惚れをして、七時からの朝管理に参加すると言いついた時には「うわあ。面倒くさいな。でも、仕方がないから付き合ってやるか」と思いながらも、そのことを隠して笑顔で領いていました。

牛舎に通うことは、私にとってかなりキツイことでした。

まず、朝が早い。私は中学校の時、七時半に起きていました。それが牛舎に通うようになってからは、五時半に起きるようになったのです。

体が慣れるまでかなり辛かったです。そして牛の管理。最初は糞かきだけだったのですが、なかなか綺麗に出来ませんでした。先輩たちの倍くらいの時間を費やしても先輩がやるより汚いのです。それでも毎日続けているうちに少しずつですが、綺麗に出来るようになりました。しかし、もともと体力のない私には糞かきだけでもかなりキツイものがありました。あともう一つ、自分自身の問題もありました。私の中では、今までで一番やる気があると思っていたのですが、それでも他の二人と比べるとやる気がないように周囲からは見えるようです。その為か、何度も友達から「本当にやる気があるの?」などと聞かれ、そのたびに私は「そうだね」とか「たぶんね」となどと誤魔化していました。一事が万事という感じだったので、教えてもらえないこと、覚えていることなどに友達との間に差が出てしまいました。

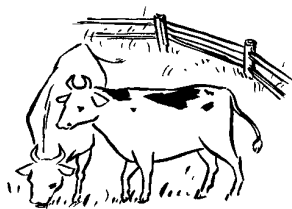
そんな私を変えるきっかけとなる、ある出来事がありました。

た。それは、牛の出産に立ち合ったことです。私はその日、用事があって少し遅れて牛舎に行きました。私が牛舎に入って一〇分もたたない内に、先生の「破水した。」という叫び声が聞こえました。先生や先輩たちが慌ただしく動き回っていました。私たち一年生は最初は分娩室の前で見えていたのですが、先輩が「中で見ていいよ。」と声を掛けてくれたので、産室の中で出産を見ることができました。その際、何人かの一年生は写真を撮るなどの仕事を貰っていました。母牛は落ち着きがなく、動き回ったり、座り込んだりを繰り返していました。陣痛の波が来るたびに母牛は苦しそうにし、先輩が「メグ（母牛の名前）、大丈夫？ 頑張って！」などと励ましていました。だんだん陣痛の間隔が狭くなり、産室内の緊張感も高まってきました。足がやっと見えたとしたら、すぐに引込んでしまう。それを何度も繰り返していました。ある程度足が出てきたところで、先生がロープを取り出し、足に結びつけ、みんなでロープを引っ張りました。体が出て来ると、麻袋ごしに子牛を支え、顔の周りについている膜を破り、そつと下に降ろしました。安堵の中、先生が性別を調べました。「オスだ！」という声が静かに響きました。先輩たちは残念そうにしながらかも、「そっか…。でも無事に生まれてきてくれて良かった」と、微笑みを見せてくれました。その後、母牛がゆっくりと子牛に近づき、子牛を舐め始めました。しばらくすると、子牛が立ち上がろうとしました。母牛もそれに気付き、頭で押して子牛が立つのを手助けしていました。ですが、「もう少し」と思うところで倒れてしまいます。何度か倒れたところで、先生が「体重測定をしましょう。」といい、みんなで

子牛をカゴに入れて運びました。子牛の体重は五〇キロを超えていました。その後、子牛をカーフハッチという子牛小屋に入れ、みんなで子牛の体をタオルで拭きました。初めて触る生まれたばかりの子牛。その体は湿っていて、しかし温かったです。しばらくすると、また立ち上がろうとし始めました。何度も挑戦している内に、少しずつ足がしっかりときました。そして、ついに立ち上がりました。

その場にいた他の一年生が、先輩に知らせに走りまわりました。しばらくすると、初乳を持った先輩がやってきました。子牛はおいしそうに初乳を飲んでいました。その子牛は、元気に育つようにと言う願いを込め、先輩が「ゲンジ」と名付けました。そして、その名の通り元気に育ち、出産から一ヶ月後に肥育農家へ出荷されていきました。

この体験を通し、私は生命の尊さを学ぶことができました。そして、自分もこのままではいけないと思うようになりました。私がちゃんとしないうちに、不幸になる牛がいるかも知れないし、逆にちゃんと世話をすることで、幸せにしてあげられる牛が増えるからです。この気持ちを忘れずに、これからの高校生活を頑張っていきたいと思います。



酪農というものを知って

東京都立瑞穂農芸高等学校 畜産科学科 一年

星 野 小 枝

私は都立瑞穂農芸高校に入学してから牛の管理をするようになりました。私が牛をやるうと思ったきっかけは、ただ「牛舎ってどんなところなのかな」という興味でした。私は本校に入学したら実用動物類型に進みたいと中学生の頃からずっと思っていました。しかし、いざ牛舎に入ると、一番入口に近いところにいた牛に一瞬で一目惚れをしてしまいました。乾草を鼻にくっつけて私を見ていたからです。それ以来、毎朝早起きをして牛舎に通っています。通い始めてからは学ぶことが沢山ありました。牛は乾草をどのくらい食べるのか、飼槽はどのように洗うのかなど、覚えなければいけないことが沢山あり、とても大変でした。力仕事も多く、初めの頃は随分辛い思いをしました。けれども、毎日牛舎に通うと、自然と力仕事も辛くなくなり、牛舎での生活がとても楽しい日々になりました。

最初は、「酪農を学んでも東京都では役に立つ訳がない。実用性のある実用動物類型の方が将来の夢につながる。」と思っていました。しかし、今となって考えてみると、酪農だって将来の自分の夢に十分関係していると思います。私の将来の夢は動物保護の仕事につくことです。本校の実用動物類型ではハクビシンやプレイルードッグなどもいて、野生動物に深く関わりがあります。けれど牛も動物であり、何より人に尽

くしているんです。言い方を変えれば、乳牛は牛乳を取るための道具に過ぎませんが、それでも生き物です。そういうことを考えているうちに気付いたことは、どのようなことを考えても、どこかで動物保護と酪農とが関係してくるということです。私たち人間の生活の中ではもちろんのこと、ペットたちにも牛乳が使われていたり、牛肉として売られていたり、酪農は私たちの生活に欠かすことが出来ません。酪農は東京都の人間だからこそ知って欲しい農業です。

最近、ニュースで牛乳が随分あまっているという話を聞きました。牛は毎日頑張って牛乳を出しているのに、努力が捨てられていくのです。酪農への理解が深まれば、牛乳をもっと沢山利用するようになるはずです。酪農の世界では、牛乳が捨てられているにも関わらず、日々牛たちの乳量を上げる改良に力を入れ、乳量が少ない牛は処分されてしまうという少々残酷な面もあります。しかし、それでも酪農が私たち人間を支えていることに変わりはありません。私たちは人への感謝の気持ちがあっても、動物への感謝の気持ちがありません。売られているのです。これは先輩が言っていたことですが、牛乳とは母牛が子牛のために出しているものであり、人間はそれをわざわざ貰っているのです。子牛へ与えるための大切な牛乳を私たちが貰っているのです。私はこの言葉に感動していました。

そして近いうちに、本校の牛一頭が淘汰されることが決まりました。足が悪く、立ち上がるのもとても辛そうな牛です。私は、とても悲しいですが、それが酪農の世界です。また、

冒頭でも話しましたが、私の好きな牛も近々出産の予定です。牛は出産して牛乳を出しますが、これこそが「酪農」です。酪農は素晴らしい職業だと思っています。酪農を学ぶことで得られるものは沢山あります。命の尊さや人間のために犠牲になる命があること、牛にも愛情を注ぎながら育てることが大切であることなどです。私は、牛舎中心の生活で、多くのことを学び、少し考え方が変わってきました。カワイイから愛す、頭が良いから愛すというのはペットへの愛です。家畜への愛は「おいしいお肉になってね。牛乳を沢山出してね」などという愛なんだと思いました。私は酪農を学んで、もっと牛について知り、牛を語りたいと思うようになりました。大好きな牛乳は更に好きになりました。

最後に、私はこれから酪農に関する勉強を一生懸命して、多くの人たちに酪農の大切さや素晴らしさを伝えていきたいと思っています。

私が考える「社会貢献」の意義

東京都立科学技術高等学校 科学技術科 三年

小 川 雅 子

今年の夏季休業中には、ある大手スーパーで五日間職場体験をさせていただいた。初日には「会社とは、仕事とは何か」というテーマの講義を受けた後、店内見学を行った。二日目以降からは、挨拶訓練を行い、実際に売り場に出て作業を行った。盲導犬との歩行体験や募金活動に参加し、また食育や企

業が取り組む法的課題についての講義もあり、多くのことを学んだ。最終日の五日目には前日までの活動内容を振り返り、体験学習成果発表会を行った。その結果、「社会貢献」について多くのことを学びとることができた。

普段の高校での生活からは、社会について考えることは困難である。しかし一つの企業を通して社会を見つめ、考えることで、社会に対して新しい視野を手に入れることが可能となった。現在、多くの企業理念に「社会貢献」という言葉がみられる。なぜ企業は社会貢献を理念に掲げているのだろうか。その答えは企業も社会を見つめ直さないとけない状況だからであると思われる。企業の第一目的が利益を得ることである。利益なくして経営を続けることは不可能であり、利益あつての企業と言っても過言ではない。しかし現在の日本や地球の現状を顧みると、環境に優しいということはとても重要である。私たち人間が豊かな暮らしを享受することで、地球環境に少なからず影響を及ぼしている。それはすなわち、地球上で生活する私たち自身にも影響を及ぼす。だからこそ生活の基盤をつくる産業社会全体が地球を考え、環境に優しくあることが重要である。家庭の中で地球や環境への配慮をすることも大切である。しかし企業では多くの人が働いている。活動規模の大きい企業で環境保護活動を推進することによって、二酸化炭素排出量が大幅に減少するなど、より多くの効果が期待されると予測される。もちろん、企業側もただ社会貢献を行うわけではない。社会貢献を行うということは企業に対してもメリットがあるのでないだろうか。

社会に貢献するということは、地域に貢献するということ

でもある。社会貢献を行うことで地域からの信頼などを得ることが可能となる。しかし理念に掲げるだけではない。きちんと行動に移さない企業は社会的な評価が低下し、いずれ敗退するだろう。自分達が掲げた理念を追求し、地域や社会に貢献している企業こそが成功を収めるのではないだろうか。社会貢献をきちんと行うことで地域の住民からの評価を得て、良いイメージを定着することができる。

私は、この体験学習を通して自分自身の社会貢献についても考えることができた。私が今できる社会貢献は、自分の生活の中で実行できる最大限の範囲で活動すること、社会に興味をもち関心を深めることだと思われる。

体験学習において、チャリティー募金の活動を行う機会があった。私や体験学習に参加している友達が募金活動を行い、募金をしてくださる人がいる。そして募金していただいたお金は、環境・福祉・災害援助などの支援活動の援助金となる。このように、私のような高校生でも支援活動を行うことで誰かの役に立てるのである。また体験学習を通して学んだことを私の糧として、さらに社会や企業に関心を常に持ち続けていきたい。

これからの未来は、私たちの世代が築いていくことになる。今から社会の現状について考えていくことで、社会人になった際に自分や社会に対して還元されることになるであろう。また支援活動などに積極的に取り組むことが、私たちにできる「社会貢献」ではないだろうか。社会に出る際には、何らかの方法で社会に貢献していける大人になりたい。

商業高校選択と私の三年間

東京都立江東商業高等学校 総合ビジネス科 三年

熊倉 美幸

私は中学の時から、なんとなく「高校卒業後は就職」と決めていました。中学三年の進路の時期に差し掛かる頃には、「高校に入ればどこでもいい」という安易な考えをもっており、自宅から自転車で五分程のところにある普通科の高校を受験しようと思っていました。担任の先生に「高校卒業後は就職したい。」と伝えると、商業高校を数校紹介され、その中でも江東商業高校を勧められました。その後、江東商業高校を含めた四校の説明会に参加しました。私は各校の卒業後の進路に着目し、私の進路には江東商業高校が合っていると思いました。両親は、施設・設備が充実し、資格取得や就職・進学の実績があることから、江東商業高校を受験することに賛成してくれ、十二月、江東商業高校を受験することに決めました。

念願の江東商業高校に合格し、平成十七年四月、入学することができました。入学してすぐにオリエンションが行われ、校長先生からは「身だしなみを整える・時間を守る・挨拶をする」という、ビジネスマナーについての話がありました。このことは、毎学期の始業式や終業式の際にもよく話され、社会に出るにあたってとても重要なことだと思います。進路指導部の先生からは「成績・出席・資格取得」が進路に向けて重要になるといふ、とても貴重なお話を聞くことが

できました。常に成績に関しては向上心を持ち、出席については皆勤を目指そうと思いました。また、資格取得にも努力をし、自分の進路に役立てようと思いました。検定に合格する為にも、簿記や情報処理を始めとする商業高校でしか学ぶことができない商業科目は、特にしっかりと勉強しようと思いました。

入学して一週間が経った頃、本格的に授業が始まりました。簿記や情報処理の授業は、正直、初めは何をやっているのか全く理解できませんでした。しかし、学習していくうちに、商業高校で学習していることは、社会に出てすぐに役立つ知識だと気が付きました。

私は三年間、勉強だけではなく部活動にも力を注ぎ、文武両道を目指して努力してきました。中学三年間続けてきたバドミントンを高校に入学しても続けたいと決めており、実際に入学し、二年生の時には部長を務めることになりました。ある時、部員同士で部活動に対する考え方が違い、休部となったことがあります。部長という立場上、中立的な立場で物事を捉えなければならず、集団のリーダーとなることはとても難しいということを痛感し、人間的にも成長することができました。また、私はバドミントン部の他に、商業高校にしかない簿記部にも入学し、毎日充実した高校生活を過ごしました。簿記部に入学したのは、簿記部の顧問の先生である担任の先生に誘われたのがきっかけです。私は、勉強とバドミントン部との両立だけで精一杯だったので入学するか悩みましたが、テスト勉強や資格取得に役立つと思い、一年生の十二月頃から入学することに決めました。

三年生になり、バドミントン部を引退して、六月からは簿記コンクールに向けての勉強が本格的に始まりました。今年は「全国大会出場」を目標に顧問の先生が張り切っており、三年生になる春休みから勉強を始めました。二年生の時に出場した時は、努力をしたのに結果が出ず悔しい思いをしました。そのことから三年生になっても、投げやりな気持ちで勉強をしていましたが、先生の熱意から不思議とモチベーションが高まり、「全国大会に出場したい」と思うようになりました。

全国大会に出場するには団体で優勝、もしくは二等に入らなければならぬので、コンクール前のラスト二週間は、毎日夜八時近くまで学校に残り勉強しました。途中、投げ出したいと何度も思いましたが、一緒に頑張っている仲間、そしてクラスの友人や家族の励ましもあり、辛くても頑張ることができました。そして日に日に自信と力がついてきたことを実感できました。当日は緊張して普段ならできる問題が解けず、焦ってしまいました。競技が終わり、結果を待っている時はなかなか気持ちが悪かったです。

「第二等、東京都立江東商業高等学校」と発表され、全国大会出場が決まった時、今まで抱えてきた不安やプレッシャーからの解放と嬉しさの余り、涙が溢れたことは昨日のことにように今でも鮮明に憶えています。七月には、IT・簿記選手権東京都大会に出場しました。団体で優勝、もしくは個人で十位以内に入ることができれば、大阪で開催される全国大会に出場できるので、団体優勝を目指して勉強しました。結果は、期末テストが重なり、一週間しか勉強できなかった為

か、団体で三位になってしまい、団体での全国大会出場を逃してしまいました。しかし、個人では十位以内に入賞でき、全国大会出場が決定しました。その時は嬉しさの反面、団体で優勝を逃し、悔しい思いもありました。両大会の全国大会に出場し、全国というレベルの高さを思い知らされましたが、とても貴重な経験をすることができました。

私は今、自分が希望する進路に向けて一生懸命頑張っています。途中、進学を考えたこともありましたが、「ここで働きたい」と思う企業が見つかったことと、早く自立したいという思いから、就職することに決めました。

今振り返ると、私の高校選択は正しかったと思います。商業高校に入学していなければ、数多くの資格取得や、簿記の全国大会出場も経験できませんでした。自分の努力は勿論のこと、友人の励ましや家族の協力、そして先生方の熱心なご指導があったからこそ、今日まで頑張ることができたと感じています。私の高校生活を支えて下さった方々に心から感謝致します。そして、江東商業高校卒業後は三年間で学んだことを活かし、誇りと自信をもって社会人として頑張っていきたいです。



マーケティングクラブでの活動

東京都立江東商業高等学校 総合ビジネス科 二年

秦 なつみ

私は今、マーケティングクラブで商業について学んでいます。マーケティングクラブは今年の二月に正式に設立された新しいクラブです。しかし、このクラブが軌道に乗るまでは、本当に苦労の連続でした。

私がこのクラブ活動に参加することになったのは、今年の夏休みに、ある先生に誘われたのがきっかけです。

その先生は、その年に江東商業高校にきた先生で、前にいた高校ではマーケティング部の顧問として生徒達の商業実践活動を支えていたそうです。

夏休みの委員会活動で活動していたとき、先生が、前の学校でしてきた活動の内容を話してくださいました。その話は私にとつてとても興味深い内容でした。そして、その話を聞いて自分も同じような活動をしてみたいと思いました。

しかし、江東商業高校にはそのような活動をする場がありません。そこで私は「ないなら作ればいい!」と考え、マーケティングクラブを設立することにしました。

マーケティングクラブでの最初の活動は部員集めでした。部員集めはとても大変でした。江東商業高校では、クラブを設立するには最低七名の部員を集めなくてはなりません。最初の段階では自分含めて四人集まっていたので残り三人集まれば、クラブとして活動することができますが、その三人が

なかなか集まりませんでした。

少しでも興味をもってくれた生徒に詳しく説明したりしましたが、参加してくれた人はほんの数名でした。それでもやつと規定人数に達することができたので、無事にクラブを設立することはできましたが、参加してくれた人たちも設立後少しづつ辞めていってしまい、常に人数不足な状態でした。今のメンバーで落ち着くことが出来たのはほんとに最近のことです。

マーケティングクラブを正式に設立してから最初に行った活動は、江東商業高校がある亀戸で地域活性化のために活動している「かめの会」が主催する『亀戸大根福分け祭り』というお祭りのボランティア活動でした。『亀戸大根福分け祭り』とは亀戸の特産である亀戸大根の収穫祭で、地元の方々や農家の方が栽培してくださった亀戸大根をみんなで分け合うお祭りです。

私たちはそこで亀戸大根や、亀戸大根の入った味噌汁の配布を手伝いました。当日は雨が降っていたというのにお祭りには地元の方がたくさん来てくださいました。

来てくださった方々はみんな楽しそうにしていました。大根や味噌汁を配ったときも笑顔で「ありがとう」と声をかけてくださり、素晴らしい体験をすることができました。

その経験から、私たちは町ぐるみで何かをするのはとても大切なことだと考え、地域活性化を目指してなにか活動していくことにしました。

まずはじめに、地域活性化のために自分たちが出来ることは何か、私たちは話し合っていくことにしました。

時間をかけて話し合った結果、「地域のモノを学校の中で購買として販売する。地産地消を校内で行い、地域活性化をねらってみよう」と考えました。さらに「活動しやすくするために、会社として運営してみよう」とも考えました。

しかし、会社といっても、高校生の私たちが設立できる会社はどれなのか、私たちは全く知りませんでした。そこで、みんなで手分けして、どのような会社組織があるのか調べることにしました。

調べていくうちに、私たちは『合同会社』という法人組織があることを知りました。

合同会社は、社員の個性などに重点を置いている『人的会社』で、出資者と経営者は同じらしいです。また、株式会社と違って利益の配当が出資額の割合に応じていないので、出資額が少なくても自分の知識を活かして会社に貢献すれば出資額に関係なく多くの配当をもらえます。

つまり合同会社は、会社と社員との関係がより密接な会社なのです。

私たちは人数が少ないので、一人ひとりの個性を重視し、より密接な関係を築ける会社の方がいいと考え、合同会社で組織を設立させることにしました。

今はその組織の中でどのような事業概要にするかを話し合い、定款を作成しています。具体的には江東商業高校にコンビニを作ろうと企画を練っています。

そんな中、九月にマーケティングの大会がありました。高校生で模擬会社を経営するなど、私たちのように商業活動を実践している高校生が、今までの成果を発表しあう大会です。

私たちはその大会に参加し、この活動を発表してみることにしました。

大会では、今までの活動のレポート提出とコンピュータを利用しプレゼンテーションを行っていきます。私はスピーチを担当しました。準備時間が短く、経験もまだまだ不足していましたが、結果は優良賞を受賞することができました。他の学校の発表をみることもでき、次のステップへ繋がるとてもいい経験になりました。

マーケティングクラブでの活動はまだ始まったばかりなので、やることがたくさんあり、これからどんどん忙しくなると思います。難しい問題にぶつかって投げ出したくなったりもするかもしれません。

しかし、マーケティングクラブでの活動はこの江東商業高校でしか経験ができません。最後に商業を学んで良かったと思えるよう、成功することを信じて根気よく活動が続けていこうと思います。

産業技術の学習によって学び得たもの

東京都立八王子桑志高等学校 産業科 一年

相 原 あゆみ

私は今年から始まった、日本で最初の産業高校に通っています。私の学校は、「デザイン」「クラフト」「システム情報」「ビジネス情報」の四つの分野に分かれていて、私は「ビジネス情報」を学んでいます。一年生では「産業技術基礎」と

いう授業があり、すべての生徒が四つの分野の基礎を学びます。

私は、なぜビジネス分野なのにデザインやクラフトなど他の分野の専門科目も学ばなければいけないのか疑問でした。デザイン分野やクラフト分野、システム分野の人たちにして同じだと思っています。なぜデザイン分野なのに簿記や製図を学ばなければいけないのか、なぜクラフト分野なのにロボットテクノロジーや色彩を学ばなければいけないのかと思った人も少なくないと思います。検定についても同じです。ビジネス分野が色彩検定を受けることはありませんが、デザイン分野をはじめ他の分野は情報処理検定や簿記検定を受けます。どうしてなのでしょう。私の中で、そのことが疑問から理解に変わり始めたのは六月に入ってからでした。

私は六月に入り、「産業技術基礎」のデザイン分野の授業で絵を描きました。優秀な作品は廊下に飾られるとのことでしたが、絵に自信のない私は、先生のその言葉を大して気にとめていませんでした。後日、廊下には作品が何点か飾られていました。ほとんどデザイン分野の生徒の作品です。ところが、その中に私の作品があったのです。デザイン分野の生徒の名前の中に一人ビジネス分野の私の名前を見つけたとき、自分でも信じられず、ただ驚くことしかできませんでした。後日、その絵が中学生向けのパンフレットに使用されると知らされ、さらに驚きましたが、自分自身の大きな自信につながりました。絵について前より苦手意識もたなくなりまし

たし、自分が認められたようでも嬉しかったのです。

人は多くのことを経験することにより、より多くの可能性

を見出すことができます。限られたことばかりをやっている、可能性は開花させることができません。気付かないうちにその可能性を潰してしまうことにもなりかねません。興味のない分野でも、挑戦してみることで自分の世界を広げていくことができるのだと思います。

また、最近、校長先生から次のようなお話を伺いました。

これからの社会では、ものをつくる人もビジネスに携わる人も、それだけを学んでいるようでは足りないということです。

ものをつくる人は、そのつくったものが今後どのような流通のルートを辿るのか、またそのものをつくるにあたって、何が求められているのかというものを理解していなければならぬ。商品管理・売買する人たちも、その商品がどのようなにつくられ、何を対象にしているのかを分かっているべきではない。現代の日本に求められているのは「技術の分かる経営者・経営の分かる技術者」だと聴き、なるほどと思いました。

今まではビジネスを学ぶ上で、デザインは特に学ぶ必要がないかと思っていたのですが、今ではデザインの技術についてはもちろん、デザインをする人の気持ちも少しは理解できます。これは実際にやってみなければ分からないことです。ものづくりに関わる経験をしたことは、これから私がビジネスを学んでいく上で大きな力になると思います。

「産業関係専門科目」の学習を見直すにあたり、自分の世界を広げるためにも、技術の分かる企業人になるためにも、今しかできない経験を多くすることが大切だと知りました。また、日本国内だけでなく世界にも目を向け、将来・未来につ

いて真剣に考えていこうと思います。専門科目を勉強していくうえで大切なのは、自ら学ぼうとする意欲だと思います。今を大切にして将来につなげていきたいです。

心の宝物

愛国高等学校 衛生看護科 三年

金 村 友 希

「何で？」

平成十九年六月十三日水曜日、私が成人看護病院実習で受けもたせて頂いた八十歳の男性の患者様が亡くなりました。

その日、私は脳神経外科病棟で実習をさせて頂いていました。昼食の時間、指導の先生に呼ばれました。私は、何の話なのか分かりませんでした。ドキドキと心臓が高鳴っていたことを今でも覚えています。そして、指導の先生と内科病棟へ行くことになりました。病棟へ向かっている途中、指導の先生が詳しいお話をして下さいました。

「Yさんね。先週の水曜日ぐらいに急変して、さっきお亡くなりになったの。」

私は、言葉を失いました。大きなショックと「何で？」という死を受け入れることのできない自分自身がありました。病棟へ到着し、指導の先生に手を引かれ連れてこられたのはある病室の前でした。そこは、私があまり入室したことのない重症の患者様が入る部屋でした。その部屋へ入室すると、Yさんの周りには看護師さんが二人立っていました。そして、

看護師さんは私に優しく

「一緒にエンゼルケアする?」

と声を掛けて下さいました。

エンゼルケアというのは、患者様の死後のケアのことで、清拭やお化粧をすることです。私は、看護師さんに

「はい」

と答えました。しかし、「はい」と返事をしたものの、初めての経験で何をして良いのかわからず立ちずくんでいる私に、看護師さんは

「まず、体を拭いてもらっても良い?」

とYさんの前まで手を引いて下さいました。私は涙をこらえながら、お湯で温めたタオルを手巻き、一生懸命Yさんの体を拭きました。歯をくいしばりましたが、頭に浮かんできるのはYさんと過ごした楽しくて幸せな日々でした。

——平成十九年五月十八日、私がYさんと初めて会ったのはこの日でした。内科病棟で受けもたせて頂くことになった患者様がYさんでした。その日、私はYさんの元へ挨拶へ行きました。Yさんは、ご家族の方と楽しそうにお喋りをしていました。私が挨拶をすると、Yさんとご家族の方は優しく微笑み

「よろしくお願いします。」

と心よく迎え入れて下さいました。今でも、あの笑顔に安心感を覚えたのを覚えています。Yさんの第一印象は、笑顔がとても似合う優しいようなイメージで、私の祖父と似ていて温かみのある方だな、と思いました。

次の週、私はYさんの元へ向かいました。Yさんへ挨拶を

すると、私の手を掴みニコニコと輝いた笑顔に向けて下さいました。

この日から、私の心の宝物となった日々の始まりです。

Yさんと近くで接して気付いたこと、それは、寂しがりやで泣き虫だということ。そして、素直な笑顔を向けて私を元気づけてくれるということ。私は、そのようなYさんの気さくさで何度救われたかわかりません。

楽しい日々を過ごしていた最中、Yさんの突然の急変。朝、Yさんの元へ向かうと、酸素マスクをし、苦しうに呼吸をしている姿。いつものような笑顔が見られませんでした。私は、「どうして?」という気持ちでいっぱいでした。看護師さんから

「日曜日ぐらいに急変したの。まだ詳しい検査はしていないから原因は何かわからないのだけだね。」

とお話がありました。Yさんに「苦しいですね。私、たくさん勉強して来るので頑張ってください。」

と言うと、Yさんは「うん」と頷いて、私の手を精一杯の力で握って涙を流していました。けれど、願いは虚しくYさんの病状は日々悪化していくばかりでした。肺雑音も大きくなっていき、胸に触れるだけでもゼーゼーという呼吸が手に伝わってきました。急変してから五日目に食事が禁止になりました。食事の時間には口のまわりに食物をたくさん付けていたYさんを思うと、とても辛い悲しい現実でした。しかし、私が落ち込んでいたらYさんが心配する。今まで私がYさんにたくさん元気をもらっていたのだから、今度は私が元気を与える番だ、と決心しました。そして、私は足浴などの援助をた

くさん行いました。しかし、以前にはなかった援助に対する断りがあったのです。ですが、援助後にはYさんが出せる声を振り絞って

「ありがとう。」

とおっしゃって下さいました。私には、その言葉がとても嬉しかったのです。そのような気持ちのまま、内科病棟での実習が最終日になりました。私は最後に、Yさんへ折り紙で花を作り、その中に手紙を書いて渡しました。また、Yさんと一生の約束をしました。

「私は、将来立派な看護師になって、たくさんの方の役に立ちます。だから、Yさんも元気になって、何年後かに私が働いている病院に笑顔で遊びに来て下さい。」

とYさんは声を出すことはできませんでしたが、私には、「ありがとう。」とおっしゃっているように見えました。――

私は、そのようなことを思い返しながらエンゼルケアを行いました。

私は、身近で死を目の当たりにしたことはありません。今初めて目の当たりにして、辛さもなかったとは言えませんが、今まで感じたことのない大きなものをもらいました。それは、一言の言葉や文章では表すことのできない掛け替えのない、とても重いものです。私は、将来絶対に立派な看護師になります。それは、Yさんに恩返しはまだ出来ていないから。もらったものがたくさんあったからです。

主体となる人

愛国高等学校 衛生看護科 三年

南 麻 希

私がこの愛国高等学校に入学したあの日から二年が経ち、三度目の春が経過しました。来年の今頃はどうか過ごしているのかと、来春に結果の出る准看護師試験について不安になりました。またその一方で、合格している姿を想像し、自分は将来どの様に成長していくのかと、とても楽しみでもありません。

三年生になる前に六泊七日の修学旅行がありました。長い集団生活は多くの事を教えてくれ、普段の学校生活では分らなかった友達や自分の一面が見え、戸惑いを感じることもありました。

私は恥ずかしながら普段の家庭での生活の中で、自分でも自覚する程我が儘な部分があります。妹、弟にあれ取って、これ取って。時には母に頼む事もあります。母が

「自分でやりなさい。」

と怒ると、私はどうして取ってくれないのと逆に怒ってしまいます。学校生活の中では友達という変な気遣いがある為か、そこまでの我が儘はありません。修学旅行の中で自分の中の境界線が消えたというか、変な気遣いが無くなったのか、自然と友達に

「ねえ、それ取って。」

と言ってしまっていたのです。私はハッとしてました。今私

は自分を中心とし、自分の欲求を第一に考えたものだと思いが付きました。この時、昨年の基礎看護実習での出来事を思い出しました。

一月中旬から始まった基礎看護実習は、二クールに分けて実施されました。実習中、今まで生活をしてきた環境では知り得なかった幾つものことに気付きました。中でも一番に心掛けなくてはいけないと感じたのが、「患者様を主体として考える」という事でした。実習が始まる前、授業中に何枚ものプリントが配布されました。その中にはその項目もありました。そんな事は当たり前ではないかと特に深く考える事はありませんでした。しかし実際「患者様を主体として考える」事は予想を遙かに越えて難しい事でした。そう感じたのは二クール目に入ってからです。一クール目では主に病院の構造や機能、看護師の動き等について学び、技術面でお手伝いをさせてもらってやる事だけで手一杯でした。また、病院という環境に慣れることに精一杯で余裕もないまま過ぎていきました。

二クール目にはいると、すぐに患者様を受けもたせて頂く事になりました。まずは患者様の情報収集から始まり、その患者様の今の状態に合ったケアを行います。「患者様を主体として考える」事を実際に行うのです。しかし私の理解は十分ではありませんでした。朝ケアの計画を先生に提出する際、「何の為にこのケアをするの? このケアは今の患者様にあったケアなの?」

と問いたただかれる事があっても上手く答える事が出来ませんでした。

「このケアはあなたがただやりたいだけでしょ。患者様にとって何が一番必要なのかな。自分が主体じゃないよね。患者様が主体だよ。患者様を主体として考えるって事は患者様が一番必要としているケアを行う事なの。ケアの方法もその患者様に合ったやり方があるはず。もう一度よく考えてごらん。」

今までは日常生活の中で知らないうちに自分を主体として考えていた事が多くありました。病院実習が始まりいきなり患者様を主体に考える。それはやはり普段我が儘を言っている私には本当に難しい事でした。家族だから、友達だからという甘い考えを無くし、私はもっと精神的に大人にならなければいけないと反省し、少しずつでも考え方を変えていこうと思いました。

実習終了後、普段の生活の中で注意してみると、どれだけ自分中心で考える生活をしているかよく分かりました。主体という事を意識する事で、今までよりも自分自身の事が分かるようになった気がします。そして、状況に応じて相手を主体として考えることの大切さを改めて感じました。それが休みに入り人と接することが減ると、その事を忘れてしまっていました。忘れていた事を修学旅行という集団生活の中でもう一度認識する事が出来ました。自分の未熟さに気付き、人の立場になって思いやる事を忘れていた事にも気付きました。「患者様を主体として考えるということから、私は沢山の事を学びました。今まで気付かなかった自分の動作や心情、相手を思う気持ち。実習を行ったことにより病院の事、看護師の事、そして自分自身の事、周囲の事を知る事が出来たと思

います。

看護師になる為、この愛国高校の衛生看護科に入学し看護について学んできました。入学当初は看護師になるのだという強い気持ちを胸に一步ずつ進んでいました。時が経つにつれ、自分の目指すものは看護師で本当に良いのか、自分に看護師という人の命を預る仕事が出来ると不安になった事もあります。ですが実習を通じて自分を見つめ直す事が出来、今ある不安もきつと誰もが感じていたもので、いつかは乗り越えられるものだと思うようになりました。看護師という職業は悩みながら、更に次を目指していくものだと思います。私が成長するにも悩む事は必要なのです。このように前向きに考えられるようになったのは、たくさん先輩方にお話を伺い、助言を頂き、家族に応援してもらったからだと思います。

そしてまた、一緒に看護師の道を目指す仲間と支え合ってきたからだと思っています。自分を鍛え直しながら、また国家試験まで皆で支え合って頑張っているように思います。

自分の夢への道が開けるように、これからも勉強に励んでいきたいと思っています。そして、家族、先輩、友達に感謝の気持ちを忘れないようにしたいと思います。



夏休みのボランティア活動を終えて

蒲田女子高等学校 普通科 一年

石 川 美 穂

私は特別養護老人ホームで、三日間ボランティア活動を行いました。ボランティアは、以前から興味はありましたが、参加する機会がなく、今回が初めてでした。しかも、場所が特養ということもあり、行く前は緊張と不安で一杯でした。

一日目、施設に着き、私達は中を案内して頂きました。施設は静かな住宅街の中に建っていて、周りに自然も多く、とても良い場所だなあと感じました。部屋は一人部屋と四人部屋があり、利用者さんに街のような雰囲気を感じて頂きたいと、階ごとに「多摩川通り何丁目」と名前が付けられていました。施設内は、バリアフリーが徹底されていて、トイレには左右どちらに麻痺があっても大丈夫のように、手すりがいくつも付けられていました。意識して見ないと気付かないような所もバリアフリーになっていました。それを見て私は、利用者さんの気持ちになって物を見つめ、考えることの大切さを感じました。

その日、私達は家族会の方達と夏祭りの準備をしました。初めは何をすれば良いのか分からずに、立ち止まってしまいう事が多くありました。しかし、慣れてくると、言われる前に自分から進んで行動し、分からない事もすぐ聞いて準備もスムーズに行えるようになりました。夏祭りの準備が終わると、今度は手に麻痺がある利用者さんが持つ茶袋作りを行いました。

た。茶袋に使い終わったお茶っ葉を入れる作業です。そのとき、作業を行う私達の近くに、施設に入ったばかりに見える女性の利用者さんが来ました。その利用者さんは、施設の職員さんに、

「御家族がここでホテルのような気持ちでくつろいでくださいとおっしゃってましたよ。」と説得されていました。しかし、それを聞いた途端、利用者さんは一気に寂しそうな顔になり、「部屋に帰る。」

と言って、帰ってしまいました。その表情が本当に寂しそうで、三日間の中で一番印象に残っています。施設がどんなにきれいでも、使いやすくても、やはりその利用者さんは自分の家が一番なのだと思います。そのような利用者さんの心のケアの大切さを痛感しました。

二日目、夏祭りに使う紙の花とポスター作りを行いました。私は花作りをやっていたのですが、裏では夏祭りについての会議が行われていました。聞いていると、物の値段や売り方など、すべて利用者さん中心に考えられていました。私には考えつかないような事まで細かく考え、計画されていて、とても勉強になりました。

三日目、二日目と同様にポスター作りと風船をふくらませる作業を行いました。この日は個室でひたすら作業を続けていたので、利用者さんとの交流は残念ながらありませんでした。しかし、ポスターが完成すると、施設の職員さんにとっても喜んで頂いて、頑張ってやって良かったです。

私が今回三日間のボランティアを通して感じた事は、人の温かさです。常に利用者さんの身になって物を考え、行動し、

昼食を食べながらも、ノートに何かメモをしている施設の方達を見ていたら、私も将来、福祉か医療関係の職に就き、人の役に立ちたいという気持ちが高まりました。そして、もう一つボランティアを行う中で感じたことがあります。それは、利用者さんと利用者さんの家族の方の心のケアはもちろん大切ですが、介護を職としている方の心のケアはどうなっているのだろうかということです。私が今回ボランティアを行った施設は、笑顔の絶えないとても良い所でした。しかし、休み無しで常に利用者さんのことを考えていたら、さすがに疲れやストレス、悩みも出てくると思います。ただでさえ、少子高齢化で働き手が足りないのに、このままでは福祉で働きたいと思う人が減ってしまうのではないかと不安になりました。

私にとってこの三日間は勉強になることばかりでした。今回学んだことは、将来に活かし、繋げていきたいです。

将来のために

昭和第一学園高等学校 建築科 二年

大道寺 明日馬

僕は、祖父が大工で工務店を経営していたこともあって、昔からものづくりが好きです。

そこで高校は建築科を選びました。自分の好きな教科ばかりで、授業が毎日楽しいです。部活動は建築デザイン部に入部しました。部活動では先生や先輩にいろいろなことを教え

て貰い、知識も技術も深めていくことができます。

一年生の夏には「全国高校生ものづくりコンテスト関東大会」に出場しました。課題を完成させる事はできましたが、残念ながら良い結果を残す事はできませんでした。

建築デザイン部では、「もてなす心を学ぶ」ということで活動に茶道を取り入れており、その際に使う道具も自分達で手作ります。

例えば立礼（りゅうれい）と呼ばれる、野点をするときの、机や椅子などを作りました。竹を山に採りに行くところから始め、授業で出た廃材を利用して骨組みを作り、竹を貼って仕上げをしました。そしてその道具を使って文化祭でお茶会を開きました。お茶会はとても好評で、学校の後援会から依頼を請け、後援会の総会でもお茶会を開きました。

部活動では他にも、ものづくりコンテストの練習で作った作品を廃材として利用し、「屋根の下敷きになった人を救助する」という内容の教職員防災訓練に使う屋根と人形を作りました。骨組みはコンテストの廃材、仕上げは授業で作成した図板のベニヤ板を貼り、かなり実際のものに近い形の屋根を作りました。

防災訓練では、手作りのダミー人形をその屋根の下にはさみ、ボールやジャッキで屋根を持ち上げ、人形を救出するという方法を行いました。この訓練は、「生徒が先生に教える」という、授業とは逆の立場になって行いました。この防災訓練も先生方にとっても好評で、「是非来年もお願いします。」「実際にここまでちゃんとした訓練をしている学校は少ないですよ。」「説明がとてもわかりやすかったです。」などと、たくさ

んのお褒めの言葉を頂きました。

自分達で作った作品が、このように評価され、人々の役に立てたことがとてもうれしいです。建築業の「やりがい」というのはこういうところにあるのだなと思いました。

学校で建築を学ぶようになって、日頃の自分の視点がかなり変わりました。工事現場を見つけると、どんなことをしているのか気になって立ち止まってみたり、登校中には立ち並ぶ家々の屋根を見比べてみたりと、いままで気にしていなかったことが気になるようになり、その疑問に思ったことは祖父や先生に聞いたりして知識を深めています。

特に祖父は昔の工法や道具などの貴重な話を聞かせてくれました。まさに「歩く教科書」と呼べるほどの博識で、とてもありがたい存在でした。しかしそんな祖父も今年の春に亡くなってしまう、とても残念な気持ちです。

祖父の存在はとても偉大でした。祖父の工務店があったからこそ僕はものづくりが好きになることができたし、大工仕事の手伝いを通してたくさんの方の技術を身につけることができました。祖父には感謝することばかりです。祖父は、僕が建築の道を歩むと決めたことをとてもうれしく思っていたと聞き、やはり将来は建築の仕事を受け継ぎたいなと思いました。

僕は、両親が福祉の仕事をしていることもあって、建築と一緒に福祉関係の仕事にも携わりたいと思い、今は必死に福祉住環境コーディネーターの勉強をしています。

バリアフリーやユニバーサルデザインという言葉をよく耳にするようになった昨今ですが、実際には障害のある方が、使いにくい施設や物はとてもたくさんあります。そういった

ものを少しでも無くして、障害のある方も生活しやすい社会にしていければ、と思います。しかし、「どんな人にも住みやすい家」は存在しないとも思います。

例えば、目の不自由な人の場合は、部屋と部屋の間に段差があった方が、部屋の境目がわかるので住みやすいですが、足が不自由な人にとっては段差は無い方が住みやすいものです。トイレも広い方が使いやすい人も居れば、狭い方が使いやすいという人も居ます。だから僕は「その障害や生活に合った家」を設計したいと思いました。

小さい頃から障害のある方と接する機会が多かった僕は、体で覚えているようなノウハウも多少持ち合わせているので、こういった細かなニーズにこたえられる家を、将来作りたいと思っています。そのために今は、できるだけ多くの知識と技術を身に付けるため、「勉強あるのみ！」だと頑張っています。

決 意 表 明

村田女子高等学校 普通科 三年

齋 藤 めぐみ

私が看護師になりたいと思ったのは、中学生からだ。ずっと何か人の役に立ちたいと考えていたが、ある日「看護師になりなさい」と言われたような夢を見て、それから気になって頭から離れなかった。その夢から数日も経たないうちに、母から祖父が癌であることを聞かされた。突然だったので、

知らされた日は泣き続けた。休みの日、新潟にある病院へ家族全員でお見舞いに行った。胆嚢癌たんのうがんで身体は黄疸おうだんがでて、活発だった祖父からは想像もつかないぐらい衰弱し、数週間後に他界した。お通夜で祖母に聞いた話が、私が看護師を目指す一歩の始まりだった。それは、祖母も若い頃看護婦になりたかったそう。しかし当時は、戦場で活躍しなければいけないので身長制限が設けられ、それに合格できない祖母は仕方なく諦めたそう。

月日は流れ、高校生になった。夏休みに入り、突然一本の電話が来た。それは、伯母の余命が宣告されたという内容だった。伯母はいつも明るく、笑顔の絶えない人だった。そんな元気な伯母が病気ということが、衝撃的で信じられなくて、母と一晩中泣いた。しかし、何時までも泣いていられないので、母と伯母の前では、いつも通りの笑顔でしようと約束をした。お見舞いに行ったときは、元気そうでいつもの笑顔を沢山見せてくれた。次に会った時は、手術後だったので、髪の毛は剃っていた。髪も染めることができないので、白髪が八割を占めていた。前より体が細くなっているのがわかった。状態が安定したので、帰宅できたので、久々に会いに行った。前よりも、より痩せていて言葉を失ってしまった。また伯母は、とても苦しそうで、すぐにベットに寝てしまった。次に行った日は、唸るような激痛と闘っていた。この頃には、喋ることはすでに困難で、思い通りに動いてくれないことに苛立ちを感じていたそう。私が最後に行った日は、偶然にも起きていた。隣に座り手を握ると温かくて安心した。喋ることも、言葉を理解することも、自力で体を動かすこともでき

ない、恐らく姪のこともわからないという状況だったが、すごく小さな力で握り返してくれた。僅かだが、微笑みかけてくれたのを、今でも鮮明に覚えている。私は伯母に何もしてあげることができなかった。目の前で大切な人が苦しんでいるのに、あまりに小さく、無力ですごく悔しかった。そう思った日から、専門的な知識を身に付け、力のある看護師になると決心した。

看護師になると決意してからは、勉強に励んだ。もちろん勉強だけにとらわれないで行動した。高校二・三年次で一日看護体験をやり、大変参考になった。二年次では、整形外科に行った。寝ながら頭を洗う方法や身体拭きや足洗い、車椅子や松葉杖の大変さなど、どれも身を以って体験できた。三年次では、産婦人科に行った。初めて新生児を抱いて、小ささに驚いた。今までに見たこともない頭の大きさ、爪は四ミリ四方で手も足も全部が小さくて神秘的だった。全力でミルクを飲む姿が伝わってきて感動した。赤ちゃんはとても柔らかく、守ってあげたい気持ちになった。今、私に出来ることは勉強すること。家の手伝いをして、少しでも負担を減らす。男性、女性、お年寄りから幼児まで隔たりなくコミュニケーションをとり、微笑みかけること。微笑みは、悲しむ人の心を癒し、喜びの光を与えたり、社会の中に友情を育て、家庭の中に幸福をもたらす。微笑みを与えても自分から減ることはないが、貰った人を限りなく豊かにする。私の周りの人に親切にしたいと思う。毎日コツコツやれることを実行していく。

先輩の薦めでマザーテレサの本を読んでいる。彼女はたっ

た一人で奉仕活動を始めた。子どもたちの学校を始め、机も黒板もない空き地で、まず青空教室からだった。最初の日は、数人しか来なかった子どもたちも、生まれて初めての学校にとっても喜び、日ごとに増えていった。大きな不安もあったが、小さな体に不屈の闘志を秘めていた。私が本を読み感動したのは、病氣のために十七回も手術を受けたベルギー人の女性が、神の愛の宣教師会に入りたいと希望し、それに対しマザーテレサが書いた手紙のことだ。それには「とてもいい話です。精神的な面で私たちの会に加わりませんか。あなたは自分のその苦しみを捧げるのです。そして祈るのです。肉体はベルギーにあっても、心は自由です。世界に心を運んでください。主が味わった痛み的大部分を、あなたは同じように味わっているのです。痛みを与えられているあなたは、主にとっても愛されているということです。あなたは主に選ばれた人なのですよ。勇気を出して、そして力強く、そしてあなたの持つている沢山のものを捧げてください。」とあった。今まで自分への痛みは、神様の意地悪と考えていたが、それは違うと思うようになった。実際、怪我などをしたときに、周りの景色が少し変って見えたり、新しいことを発見できたりする。マザーテレサは、病氣も痛みも苦しみも、愛するために、自分を高めるために、その人がより幸福となるために役立つと言っている。私はこの言葉を信じて、これからどんなに辛いことがあっても前向きに乗り越えられると思う。

私は、不屈の精神を内面に秘めた人になる。患者と同じ苦しみを経験したことはないが、相手の気持ちを察して、変化に気付けるように日頃からコミュニケーションをとり、沢山

微笑みかけ、元氣を与えられる看護師になる。

私の職業観

国際理容美容専門学校 美容高等科 二年

堀 真 実

一般的に、美容という職業は一流サロンでカットやパーマなどの施術を行い、介護（福祉）という職業は病人やお年寄りを介抱し、日常生活を助けることであって、全くの別物であると考えられていると思います。しかし私はそれを結びつけたものにチャレンジしたいと思っています。ただ、それぞれの分野にいろいろな決まりがあると思うし、この考えが認められているかは分かりません。ではなぜ私がこれにチャレンジしようと思ったのかを話したいと思います。

美容に興味を持ち始めたきっかけは、小学校六年のときでした。初めて行った美容院でシザーズやコームを巧みに使い、ていねいなカウンセリングと共に希望の髪型に私は近付いていきました。施術を行う美容師さんのその姿に私はとても魅力を感じました。それで、美容に対する憧れや夢をもちました。

介護（福祉）への思いがふくらみ始めたきっかけは、私が体調を悪くして入院したときのことです。年配の入院患者の女性が白衣ではなくTシャツ、ジーパン姿の人に髪の手入れをしてもらっていました。その女性は終始笑顔で「ありがとう。」

と、とても喜んでいる様子でした。

「あの人があれ？」

と聞くと、ボランティアで来てくれた美容師とのことでした。その女性の顔を見て、病人であろうとお年寄りであろうと、美しくなる喜びがあることを知りました。

この二つの経験で、美容と介護（福祉）を結び付ける気持ちが強くなりました。

しかし、周囲の人は口をそろえて「やるからにはトップを目指せ」「一流の美容師になれば」などと言います。でも私はそういうのではなく、ただこの自分の想いが相手に伝われば、笑顔になってくれれば、ありがとうと感謝していただければ、それで良いのです。その上で認められれば充分なのです。

けれども、仕事をするならば技術面での腕も要求されます。そのために私は美容を学ぶ学校への進学を選びました。

技術面での腕以上に大切なものもあります。それは心だと思っています。髪に触れ、肌に触れ、そして心にも触れ、技術と心の二つが結び付き、初めて心の底から「ありがとう」という言葉がお客様から発せられると思います。これは美容に限らず、介護（福祉）でも大切なのはやはり心の触れ合いだと思います。心は普段の生活の中でしか学べません。学ぶというより、自然と身に付くものです。喜びや悲しみ、不安や怒りなどといった様々な感情に触れる事も大切であり、いろいろな経験をし、人間性を高めることが心を強くすると思います。

美容師になるまでも勉強、美容師になってからも勉強、学ぶことはたくさん尽きないと思います。その中でたくさんの

人と触れ合い、たくさんの笑顔を作り、美容の中に介護（福祉）を取り入れて、たくさんのありがたうをもらいたい。私はそんな人になりたいです。

私の生きがい

武蔵野東技能高等専修学校 情報処理科 三年

渡 部 麻 衣 子

なぜ人は生きるのだろう、なぜ私は生きていかなければならないのだろう、と永遠に考えていてもきつと答えが出ないであろうことを必死に探し続けていたときがあった。

中学生。子供でも大人でもなく、時に残酷であり、時に優しさのみを欲する不安定な時代。そんな中学生という時期を私は二年間不登校児として過ごしていた。そして「生きる」とその意味を問い続けていた。

「どうしてあなたが学校に行けなかったの？」と、現在の生徒会副会長として活動する姿や普段の物怖じしない強気な姿勢を見ているからか、そんな風に聞かれることがある。たしかに、不登校のきっかけでよくあるような、いじめの被害を受けたというようなことはなく、逆にいじめをするような卑屈な人間であった。だから、学校に行けなくなった理由は、私自身、明確にことばにすることはできないような曖昧なものであった。そんな曖昧な感じで入学式を終えてから、わずか一週間で学校に行かなくなっていた。私は自分の身に何が起こったのかさえよく分からずにいた。それだけに、毎日は

ただただ過ぎていった。

学校に行かなくなってから数週間後、知人に区のフリースクールを紹介され通い始めた。午前中四時間勉強したら、昼には下校をし時間割は週末に自分で作成して、先生と一対一で勉強するという学習塾のような場所であった。通い始めた頃は毎日行っていたものの、次第に欠席や遅刻を繰り返すようになった。私はすっかり自宅にいて、昼夜逆転をする生活に慣れてしまい、生徒としてすべきことを全て放り投げてしまっていた。結局、中学二年生まで二年間在籍したものの、籍だけおいてあるような場所になっていた。

「死んでいるような毎日」今振り返ってもそう思う。「自分などいつ死んでもいい」「この先、生きていたって……」と毎日思い続けて生きていた。外出した際に、他人の視線が怖いと感じ、帽子を被らないと外に出られなくなったり、自分が触るもの全てに汚いと感じ、長時間手を洗い続ける様にもなっていた。私はどんどん堕ちていった。私を取り巻く人達はそんな私を見てとても心配してくれていた。今なら感謝することができが、当時の私にとっては「うざったい」その一言で簡単に片付けてしまっていた。

人はどんな生活を送っていたとしても転機は必ず訪れるのかも知れない。中学三年生の四月に転校し、墮落していた生活から抜け出し、普通の中学生として生活を始めた。そして一年後。縁あって、今の高等専修学校に入学することになった。

そこで、私はラグビー部と出会うことになる。家庭の経済事情もあって、アルバイトをしようと思いい、部活動に入るつ

もりはなかったが、担任の先生が顧問であり、先輩からしつこいほどの勧誘をされたこともあってラグビー部に入部をし、マネージャーとなった。

入部してからの日々は、目の前に問題が立ちただかる度に遅刻と欠席を繰り返してきた私には逃げたくなるような地獄の毎日であった。先輩、後輩の厳しい上下関係、伝統や規律、「支える」という立場の重さ。「辞めたい」。入部して数週間、逃げることはかりが頭の中を渦巻いていた。

しかし、初めての公式戦で、頭から血を流しうずくまる姿や骨折していたにも関わらず、痛みを隠しながらプレーを続ける姿を見て、ラグビーは「死と背中合わせのスポーツ」だと知っていく。

「死にたい」そう強く思っていた私にとつては、「死」が間近にある衝撃的なスポーツであった。次第に、どんなに辛い練習やキツイ思いをしても、必死に立ち向かっていく部員達の姿から、何に対しても逃げてはいけないという勇気をもらった。そして、マネージャーとしての毎日は迷い、葛藤しながらではあったが、仲間と喜びを分かち合える大事な居場所になっけいき、部員を支えることが生きがいとなっていた。

「死にたい」と思っていた過去の自分がいたことが信じられないようなきらきらとした日々。今は三年生として、過去の私のように辞めたいと不安を洩らす一年生のマネージャーと向き合う毎日だ。

「人はなぜ生きるのか」それは永遠に見つからないかも知れない。しかし生きていなければ絶対に知ることができない。迷いながら、もがきながら、戦いながらきっと人はそれを模

索しながら生きていくのだろう。

